

13. 聖獣「バロン」と牛形の棺「ランブー」 —インドネシア、バリ島の聖獣二種—

吉田裕彦*

1. ヒンズー・バリ文化

バリ島。赤道直下の国、インドネシアにあって独特な響きをもった島である。総人口 2 億 3000 万人のうち、1 億 7000 万人という世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアでは、バリ島民は極めて少数派に属している。バリ島の人口は 312 万人、住民の大多数がバリ人で、彼らはイスラム教ではなく、ヒンズー・バリ教を信奉している。ヒンズー・バリはインド起源のヒンズー教がジャワ島を経由してもたらされた宗教であり、10 世紀から 14 世紀頃にかけてバリ島に定着した。その後、ジャワ島のヒンズー王朝（マジャパヒト王朝）はイスラム系のマタラム王国に滅ぼされ、ジャワの貴族、僧侶、文人らが大量してバリ島に亡命するにいたった。そして、バリ島社会は彼らの主導のもと、ヒンズー・ジャワ的文化を継承して今日のヒンズー・バリ文化となっている。

1-1. ヨーロッパのまなざし

一方、15、6 世紀になるとヨーロッパでは大航海時代が幕を開き、ヨーロッパ列強によるアジア進出が進むとともに、19 世紀後半以降、ヨーロッパ人によるアジアへのまなざしが強まった。1889 年に開催されたパリ万国博覧会では、バリ及びジャワのガムラン音楽が出展された。ガムラン音楽の音色は作曲家ドビュッシーの楽曲にも影響を与えたと伝えられている。そして、1931 年に行われた「パリ万国植民地博覧会」に参加したオランダはジャワ島やバリ島の仏教寺院やヒンズー教寺院に似せたパビリオンを建て、バリ人による伝統舞踊を上演したりした。バリ文化の出展にはオランダ人画家のウォルター・シュピースの貢献が大きかったと伝えられる。この時、彼は、後にバロンダンスとして、今日のバリ観光には欠かすことのできないショーとなっている儀礼劇チャロナラン Calongarung の簡略版を出展している。

この博覧会を機に欧米ではアジア各地への観光熱が一気に加速し、芸術家、人類学者、観光客のもとで、世界各地の文化復興がはかられていった。そんな中、バリ島の文化、芸術は欧米人にとってはひととき異彩を放つものであった。この頃、何人もの芸術家や研究者が欧米からバリ島にやってきて、住みつき、バリの音楽家や舞踊家、美術工芸家との交流を通して、バリの踊りや音楽、絵画に新しい様式をもたらした。その多くが今日のバリ島観光の主要な部分となっている。いわば、バリ島は欧米によるアジア観光開発のさきがけとなった地域といえる。

1-2. 伝統文化と観光文化

アジア各地の民族社会が近代化という経済開発の魔物にとりつかれ、各地に息づいてきた伝統や文化を風化させ、消滅させいく中で、バリ社会は自らの文化を観光資源としながらも、なお独自の慣行を守り続けている。ジャワ島をはじめとする外来の高文化を巧みに取り込みながら、数百年もの時間をかけて醸成してきた自身の文化を見失うことなく、伝統的なバリ文化は、現在もなおきらびやかに生きついでいる。

日中、バリ島諸村落のいたるところに外国人観光客の姿が見える。オダラン odalan（寺院開基祭）を始め、絶え間なく行われる行事には、常に外国人観光客のカメラが向けられていることに抵抗を示さなくなったバリ島民だが、観光客の姿が消え、夜の帳が下りると、バリ人（社会）本来の姿が蘇る。そこには欧米人の指導を受けて開発された観光用の「見せ物文化」とは違う醸成された古式の伝統を受け継ぐ文化（行事）が明け方まで展開されていることに気づく。当然の事ながら、そこにはヒンズー・バリ

*天理大学附属天理参考館海外民族室学芸員。東南アジア、台湾、朝鮮半島、南アジア、オセアニア地域の文化資源研究を担当。専門分野は文化人類学、博物館学。フィールドスタディはインドネシア、特に東インドネシア（チモール、スンバ、バリ）にて、伝統文化の探求をテーマに調査を継続するが、最近では台湾平埔族、ニューギニアをテーマとした研究活動を主に行っている。

の神々とともに、さまざまな聖獣も登場し、バリの精神世界を豊かなものとしている事を知ることができる。バリ島をフィールドとする研究者の多くはときおり、そうした現場に居合わせ、深い闇に迷い込んだ経験を共有した方も多いことと思う。

2. バリ島の聖獣

バリ島の聖獣はこのような歴史的な背景を持って現在に表出しているとみなすのが妥当であろう。そして、その一部は観光資源としても活用されていることもまた事実である。ここではバリ島社会で行われている民俗儀礼を通して、バリ島で具現化されている2種類の聖獣、「バロン Barong」と火葬儀礼で用いられる「ランブーLambu」という牛形の棺について考えてみたい。

2-1. 聖獣バロンと火食儀礼

バロンはバリの人びとが敬愛する想像の聖獣で、獅子・虎・犬・象・豚などさまざまな獣や巨大な人形の形で表現され、超自然の化身とされる。中でも人気が高いのは、獅子と虎と牛を組み合わせたような姿をした「バロン・ケケット Barong Keket」である。いくつかの動物の特性を具え、実際には存在しない動物がモチーフとなっている。このような動物の特性を組み合わせる神聖動物を表出する手法は、中国唐代に麒麟や角端などの瑞獣が生み出されたのと類似した思考様式があったものと想像される。また、日本や中国の獅子舞との関連性も強く感じることができる。

バロン・ケケットや他のバロンは一般に、ホワイトマジックを操り、病気を癒す力があると考えられている。聖の象徴であるバロンが悪の権化とされる魔女ランダ Rangda との葛藤を劇仕立てで表現される奉納劇チャロナランは、観光用に簡略化されたバロンダンスとしても演じられている。劇の最初に登場し、穏やかな世界が続くことを願う所作がなされるが、やがてランダによる魔の手を受け、悪の力がはびこる世界の情景へ移り変わり、踊り手たちは聖剣クリスを自分の体に突き刺す自傷行為に及ぶ。劇の最後でバロンとランダとの戦いが行われ、バロンはランダによる、悪の力に支配された踊り手たちを解放して終幕を迎える。

また、バロンは日常、ヒンズー寺院の一面に安置されているが、専属の僧侶の采配で、人びとの前に姿をあらわし、厄払いのために村中を練り歩いたりする。

バロンの胴体は、彫刻して金彩を施し、鏡をつけてキラキラさせた皮の飾りで覆われている。中には二名の踊り手が入る。体毛やひげは棕櫚（パーム椰子）の幹の繊維でできており、からすの羽が使われたりしている。バロンの踊り手は、サルッ Saluk とバパン Bapang と呼ばれ、それぞれ「頭と前足」「後足と尾」を担当する。

天理参考館に収蔵するバロン・ケケットのかしら（図1）の舌に6個の文字が呪文のように書き込まれている（図2）。文字はモドレ流バリ文字（ジャワ文字の一種）である。聖獣の口から「言葉（ことのは）」を発する様を表すとされる。いわば舌文字である。従って文字はすべてバロンの側、つまり舌の根元の方から見て読める方向に書かれている。



図1：バロン・ケケットのかしら（天理参考館蔵）



図2：バロン・ケケットの舌に記されたバリ文字

表 1：バロン・ケケットの舌に記されたバリ文字の表音と意味

上段			Ong=唯一絶対性を象徴する至高神
Ong	Ang	Ung	Ang=創造神ブラフマ
			Ung=維持神ヴィシュヌ
下段			Mang=破壊神シヴァ
Mang	Ang	Ah	Ang=創造者としての善なる光明を象徴
			Ah=創造者としての悪なる光明を象徴

いずれも一字ずつ独立した聖音、聖字（表 1）であり、それぞれの文字は以下のような象徴性を示している。

「唯一絶対の至高神を象徴する Ong は Ang, Ung, Mang の三文字で代表されるヒンズー教三神の一体を示す聖音とともにあり、Ang, Ah というこの世に常在し、未来永劫失すことのない善と悪を示す聖音二文字に象徴することができる」というようなバリ島のヒンズーイズムを表象する、聖音・聖字が舌文字として表されている。言霊を凝縮させたようなこの舌文字は、まさにバロンという物言わぬバリ島の聖獣が、その口から気を吐き出しているかのようなのである。いわば、宇宙の天変生成の原理を象徴とする言の葉としての聖音、聖字がバロン・ケケットの舌にしたためられていると言える。

【火食儀礼に登場するバロン】

バロンが登場する祭儀礼として、バリ島中東部の山間の村ヤン・アピ Yang Api 村のヒンズー寺院で行われたサンヒャン・ジャンゲル・ムボルボル Sanhyang Janggeru Mbolubolu（注 1）という「火食儀礼」を見てみることにする。

火食儀礼は地域内で疫病が流行したり、不吉な出来事が続いたりした際に不定期に行われている行事である。この行事は 15 日ごとに巡ってくる霊力が強いカジャン・クリオン（注 2）の日が選ばれて行われる。儀礼の中でバロンやランダが憑依し、世の中が動乱する様子が表象される（図 3）。



図 3：火食儀礼に登場し、トランス状態となったバロン・ケケット



図4：穢れた火に浄化のための祈りを捧げる司祭（中央の白服）



図5：トランス状態となった男女が、たき火に飛び込み、火や炭を口に入れたり、手や足で蹴散らしたりする

焚き火の炎もまた、村にはびこる悪霊や災厄を表している（図4）。トランス状態に陥った村人が焚き火の炎に飛び込み、火を食べ、炭火を蹴散らす様は村から悪霊や災厄を追い出すことを意味している（図5）。

全ての火が消え、倒れ込んだ村人が正気を取り戻すと、村には再び平和が蘇るという演劇効果が埋め込まれる。炎やランダの登場は「不浄」との意味があり、バロンや火を食べる憑依した人の姿には「浄化」の働きが期待されている。

2-2. 火葬儀礼と牛形の棺「ランブー」

インドと同様にバリ島においても牛は崇拝の対象である。神話にもたびたび登場する。例えば、シヴァ神の乗り物はナンディンという牡牛である。また、叙事詩『マハーバーラタ』にヴィシュヌ神の化身として登場するクリシュナは、牛飼いを生業とする王子として描かれ、民間に幅広い人気を博している。

インドでは白毛のこぶ牛が神聖視されているが、バリ島ではこぶ牛の他、黒毛の牛も神獣とみなされている。それを表象する例として火葬儀礼で用いられる「ランブー-lambu」という牛形の棺がある（図6）。

アベン Aben あるいはガベン Ngaben と称される火葬儀礼は、バリ島のヒンズー教徒にとって最も関心の高い行事の一つである。死者の霊を浄化し、その霊を「神」に昇化させることが火葬儀礼執行の目的とされている。火葬の炎と共に死者霊を空高く舞い上がらせることにより、死者は天界でよりよい存在となって生まれ変わるとみなされる。ここでは2005年にウブド Ubud で行われた火葬儀礼から、聖獣としての黒牛について考えてみる。

バリ島の火葬儀礼は二次葬として行われている。人が亡くなると、一旦遺体は地中に埋葬される。人びとは祖霊が暮らす世界が天上にあると考える。彼らは死者の霊をできるだけ早く天界に送り届ける必要があるとも思っている。そのため二次



図6：プラ・ダレムの広場に到着したランブー
この後、胴体の棺に死者が入れられ、火が放たれる

葬で行われる火葬の準備が急ピッチで進められる。中でも手間と時間、費用がかかるのが、遺体を入れる葬塔「バデ bade」と黒牛を象った棺「ランブー」の製作である（注3）。死者の社会階層が高くなるほど、大きなものが必要とされ、半年～1年もしくはそれ以上の準備期間を要する場合もある。従って、火葬儀礼が執行される頃には、人びとはようやく死者を天上に送り届けることができるという安堵からか、大半の人びとが晴れやかな表情であることが印象的でもある。

火葬儀礼は死者が暮らしていた家から「プラ ダレム Pura Dalem」という死者の寺院へ向かう葬列の行進から始まる。葬列の最後尾を陣取るようにして黒牛を象った棺「ランブー」と遺体を入れた葬塔「バデ」が続く。どちらも数十人の男性が御輿を担ぐようにして行進する。

プラ ダレムの庭には4本柱の火葬堂（バレ パスマン Bale pabasumian）が設けられ、黒牛のランブーはその中に置かれる（図6参照）。4本の柱を沙羅双樹に見立てたすると、釈迦入滅時の涅槃図と同様の光景がそこに映し出されていることがわかる。

葬列がプラ ダレムに到着するとバデから遺体を取り出し、ランブーの胴体に設けられた棺に移し替え、死者の旅立ちの持ち物となるような品々と共に安置される。ここで、私たちは黒牛が死者を天界に送り届けるさまが表象されていることを知る。

遺体をランブーに移し終え、高僧の祈りと共に聖水や供物が捧げられた後、ランブーに火が灯され、続いてバデにも点火される。ランブーやバデの炎は空高く舞い上がり、人びとは死者の霊が黒牛に連れられて天界に到達することを実感する（図7）。

バリ島の火葬儀礼では死者の霊を天界に届ける大切な役割を黒牛は担っている。そして、その姿が棺という姿で会葬した人びとの眼前に顕れ、炎や煙となって遺体と共に昇華するさまが表現されている。



図7：大きな炎を上げて燃えさかるランブー
火葬儀礼のハイライトシーン

3. まとめ

伝統文化から遊離し、近代化、観光文化化したバリ文化が顕著となっている今、バリ島では本来の伝統文化と変容して現在に息づく文化との境目がわかりにくくなっていることは事実である。このことを念頭に置いて、バリ島の聖獣について考えると、善の象徴とされる聖獣バロンは、夜を徹して行われるチャロナラン劇のような伝統文化と、同劇を省略し、日中から夕方にかけて行われるトランスダンスとして観光客に見せる観光文化の双方に顕れてくる。今日、ツーリスト向けにアレンジされた「観光文化」がバリ島の全土を席卷しているかのように感じられるが、浄化儀礼や火葬儀礼など、主体をバリ島民自身とする行事には彼らの「伝統」が着実に継承されており、熟成された文化の片鱗を伺うことができる。いわば、バリ島には「昼の顔」と「夜の顔」とが併存するとみなすのが妥当と思われる。

規模が大きな火葬儀礼は、京都の「祇園祭」や岸和田の「だんじり祭」のように外来者の視線を気にすることはなく、自身の文化に矜持を示す表象の一つとして展開させているとみなすのが妥当であろう。また、浄化儀礼として行われたヤンアピ村の「火食儀礼」は村人が自分たちの生活空間を浄化することを目的として夜を徹して催された行事であり、外来者は無断で入り込むことはできない状況下で行われていた。

こうしたことから、ここに紹介した二つの行事は観光文化化するバリ島にあって、今なおその伝統文化を継承し、熟成させている文化要素の一つとしてとらえることができるであろう。そして、そこに登場し、バリ島の伝統文化に顕れる2種類の聖獣の存在についての考察を試みた。

その結果、火食儀礼に登場する聖獣バロンは普段、ヒンズー寺院の一隅に保管され、不安定となった世界を浄化させる時、人びとの期待を集めて登場し、平穏な世界を回復させる役割を果たす存在であることを確認することができた。一方、黒牛を象った棺「ランブー」は死者を天界に導く役割のもとに表出させる聖獣の一つとの結論を得た。この二種類の聖獣はその役割こそ違い、バリ・ヒンズーの世界に存在すると考えられる異界を自由に往来し、現世の人びとに安らぎを与えるという共通の要素を備えているとみなすことができる。

注

(1) サンヒャン *sanhyang* とは村にはびこる悪霊や災厄を払うために行われる儀礼で、神降ろしの儀礼ともみなされている。観光地では神降ろしの儀礼としても紹介されている。ジャンゲル *janngeru* は歌舞音曲を伴う芸能全般を指す言葉で、バリ島では寺院祭礼（オダラン）に奉納される芸能の総称でもある。よってこの火食儀礼は「村にはびこる悪霊や災厄を払うために歌舞音曲と憑依現象（トランス）を伴って行われる神降ろしのムボルボル儀礼」という意味を持つ。

(2) バリ島独自の暦システムの一つに 210 日を 1 年とするウク暦（パウコン暦ともいう）がある。ウク暦では 1 日を 1 週とする数え方から 10 日を 1 週とする数え方まで合計 10 種類の週が存在する。その中でも重要とみなされているのが、3 日週と 5 日週である。3 日週は、パセー *paseh*、ベトゥン *beteng*、カジャン *kajeng* の 3 曜日が繰り返される週であり、5 日週はウマニス *umanis*、パイン *paing*、ポン *pon*、ワゲ *wage*、クリオン *keliwon* の 5 曜日でカウントされる。そして 3 日週と 5 日週を組み合わせていくと 15 日毎にカジャンとクリオンとが重なるカジャン・クリオンの日が巡ってくる。この日は寺院への参詣に良い日とされ、1 年（210 日）毎に開かれる寺院開基祭（オダラン）もこの日に行われることが多い。しかし、カジャン・クリオンの日は悪霊が徘徊する危険な日でもあり、さまざまな悪霊鎮めの儀礼が行われる。ヤンアピ村の火食儀礼もこのようなバリ島の文化的脈絡の中で行われている。

(3) 死者の棺となるのは、竹で組んだ枠に紙を張り付けて作った張り子の黒牛の胴に遺体を納める棺が設けられたものである。社会階層が高い旧王族の棺には、白牛を象った「ランブー」が用いられることもある。バリ島で見られる牛の多くは茶色い毛並みの赤牛である。赤牛は黒牛に対するほどの聖性は認められていないようで、ヒンズー教の儀礼時に犠牲獣として供犠されたり、赤牛の肉は食材になったりしている。また、スイギュウはその色は黒いが聖獣の範疇からははずされている。

参考文献

北澤裕

2011 「「器官なき身体」への眼差し」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』第 21 号、pp.1-24 早稲田大学大学院教育研究科

中村潔

1994 「神々の島バリーバリ＝ヒンドゥーの儀礼と芸能」春秋社

山下晋司

1999 『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会

吉田禎吾

2011 『バリ島民一祭りと花のコスモロジー』弘文堂

吉田裕彦

1997 「バリ島の暦事情とバリカレンダー」『天理参考館報』第 10 号、pp.105-118、天理大学出版部
和田純、峰岸由紀

1981 「変幻する神々－熱きアジアの仮面展図録－」日本放送出版協会

Fred B. Eiseman, Jr.

1990 Bali: Sekala dan Niskala Vol.1 Periplus Edition Berkeley, Singapore.

13. Sacred Animals "Barong" and Cow Styled Coffin "Lambu": 2 typed Sacred Animals in Bali, Indonesia

Hirohiko YOSHIDA*

Bali is an island with unique sounds in Indonesia, a country right on the equator. A large number of tourists come to feel rich Bali culture from all over the world.

As racial societies in Asian countries modernize after the late 20th century, their traditions and the original cultures those breathed in each places become extinct, and the mono-culturalization of the life style becomes remarkable. Bali which conveys Hindu-Bali culture planned the modernization by their own culture as an attraction for tourists. But the traditional Bali culture still stands out now.

It would be proper to consider that sacred animals of Bali express it with such a historic background at the present. In fact a part of sacred animals is utilized as tourist attractions. I would like to investigate two kinds of sacred fauna embodied in Bali, "Barong" and a cow-shaped coffin called "Lambu" cremation courtesy through cremation courtesy performed in Bali society in this report.

Barongs are expressed in the form of various beasts such as a lion, a tiger, a dog, an elephant, a pig and huge dolls in imaginary sacred animals, all of which Bali people love and respect. Barong is believed as a supernatural incarnation. Above all, "Barong keket" with the shape of a lion and a tiger and a cow combined together is popular. It possess characteristics of several animals, and its motifs are animals which do not exist in the real world.

Barong Keket and other Barongs handle a white magic generally, and it is thought that they have power to heal a disease. Dedication drama Calonarang expresses the tangle a witch Landa and Barong. They are symbols demon and holy. The drama is played as a barong dance simplified for sightseeing.

There is an "eat fire (or purification) festival" called Sanhyang Janggeru Mbolubolu in which a Barong appears at Hindu temple of the mountain village, Yang Api in the middle eastern district of Bali.

Cow is an object of worship in Bali like India. A white lump cow is deified in India, but a black cow is also considered to be an auspicious animal in Bali. For example there is a coffin with the form of called "Lambu" used in cremation ceremony.

The cremation ceremony named Aben or Ngaben is one of the events that the most highly concerned for Hindu people in Bali. Purifying the soul of the dead, and sending the ghost to the heavens are inteded in the cremation courtesy execution. It is considered that a dead person comes to be better in heavens, and to be reincarnated by letting a dead person's ghost high in the sky with flame of the cremation. I try to think about a black cow as sacred animal from cremation ceremony performed in Ubud in 2005 .

*Curator of Tenri University Sankokan Museum, in charge of foreign ethnology.